

哲學史家としての朝永先生

野 田 又 夫

一

哲學史家としての朝永先生の業績についてあらましの報告を書くことが私に課せられた仕事であるが、いま改めて先生の著作の主なものを拜見して、自らの用意の不足を痛感する。先生の業績を全體的に評價するやうなことは、急いで企て及ぶところではない。ここではただ、私の狭い視野においてできるだけ客観的な回顧を試みることによつて責をふさぐのみである。このことを最初にお断りしておかねばならない。

哲學史家が、哲學の歴史家であるかぎり、一定の哲學的立場をもたねばならぬことはいふまでもない。もちろん哲學史研究には、資料の吟味、事實の客観的科學的探究といふやうな作業が含まれ、必ずしも史家自身の哲學を要しない面もあるけれども、しかしその中心資料が哲學そのものなのであつて、その理解は結局は對決となるほかはなく、過去の哲學を一定の立場から批判し評價することを避け得ない。そこまで到らなくては、哲學史を一つの形に仕上げることはできない筈である。朝永先生はいかなる哲學的立場に立たれたか。先生が明治四十二年に出された『人格の哲學と超人格の哲學』及び大正五年の『近世における我の自覺史』が、それに答へる。

『人格の哲學と超人格の哲學』は、「個人主義對普遍主義」、「人本說對絕對說」の問題を縱横に論ぜられた論文をふく

み、この對立が近世ヨーロッパにおいて一方イギリスやフランスと他方ドイツの、思想と文化との特色を示すこと、同時にヨーロッパ對アジアの對立も概してその點にあること、その間において日本の思想と文化の過去及び將來如何、といふやうな點に、若々しい論議が試みられてゐる。最長篇の表題には「西洋に於ける沒我思想と自我思想との消長と民族的分布とを述べて吾邦の思想に及ぶ」とある。西洋哲學史についての正確透明な理解が示されてゐることといふまでもないが、この論集における先生は、それを武器として立つ文明批評家である。「主知的日本人」といふ文章には、日本人の思想・文化・政治すべてにおいて執拗な根本的な對立葛藤の見られぬことを指摘せられ、例へば政治において明治維新がさうであり、外國思想に對するわが思想家の態度も概して批判的傍觀的であつたと考へられ、さういふ見方から將來の日本人の思想上の仕事の豫想をまでも試みられた。「思想界などに於いて將來日本人が人類に貢獻し得べき役目も大體推察が出来る様にも思はれる。即ち其役目は自ら役者となつて偉大なる建設を試み、偉大なる製作を出すといふ（此點に於ては既往と雖も日本人は成功して居らぬ）よりも、寧ろ主として傍觀者の地位に立ちて他の建設や製作に對して公平な冷靜な批評を下すといふことにありはせぬかと思はるのである。」そして一流の淡白さをもつてかう附言される、「出來ぬ方のことを思へば聊か心細くもなつて來るのであるが、併し又た、他の出來ぬ特長を有つて居るところを思へば、大に人意を強ふするを得る次第である」(三一二頁)。

* かかる判定に對し直ちに山路愛山が駁したらしい。また他の評家は、朝永先生こそ「自己批評的人」であると評したらしい。先生はそれを「甘受する」といはれ、評者が「將來我國民が單なる自己批評に甘んぜずして進取的活動を營むに至らんことを望まれたる希望」にも「予は同意する。唯此場合に於いても予の所謂主知型の長所をば過度に保留するといふことが我國民的生命の連續、擴張、充實に取つて切要且つ有効であると予は思ふのである」と答へられた。

しかしながらこの書物はまた先生が當時の西洋哲學のうごきのどの點に關心されてゐたかをも示してゐる。それは「人格的唯心論」(personal idealism)のつまりイギリスにおいてグリーンやケヤドのヘーゲル主義に對して、その絶對主義的汎神論的傾向を非として起つた個人主義人格主義の考へ方であつた(ヘセス、スタウト、シラー、ギブソ

ン、ラッソドル等)。後の歴史から見ればイギリスにおけるヘーゲル主義への反撥は、上の人々よりも稍後れたラッセルなどにおいて劃期的な成果を生んだと見えるが、當時朝永先生の同感されたのは、上の諸家であり、アメリカではロイスによりもジェームズの方に同情をもたれたのである（「人格的唯心論の歴史及梗概」）。——それゆゑ同じやうな動機をもつて現はれたドイツの新カント主義、殊に歴史を重んずる西南學派のそれが、その後朝永先生の哲學者としての立場を結晶させる軸となつたことはごく自然な經過であり、そして上にのべた先生の自由主義的傾向が、先生をして新カント主義に永くとまらしめる素地となつたのである。すなはち、明治四十二年外游、ドイツにおいて親しくヴァインデルバントの講義をきかれ、歸朝後公けにされた『近世に於ける我的自覺史』(大正五年)において、先生の哲學的立場はきつぱりした形をとることとなる。

『我的自覺史』の明晰な論旨をここにくりかへす必要があらうか。幾代もの學生がこの透明な泉に汲んだ。結論のみをいはう。それは全くヴァインデルバントの立脚點に一致する。第一に、カント以後のドイツ觀念論、ことにヘーゲルに對する批判がある。ヘーゲル哲學は、精神の絶對性の主張によつて個人格の自律を没却する危険を示し、且つ、價値と事實とを汎神論的に一元化することによつて却つて、「價値」においては相對論的乃至ニヒリズム的となり、また「事實」の方からいへば、自然主義的唯物論的となる。それゆゑ溯つてカントの人格主義・批判主義(事實と價値との二元論)にもどらねばならない。そして第二に、このカント主義によつて、近世科學に結びついた自然主義に對して、理想を擁護することができ、ことにその自然主義の社會的政治的な現はれ例へば史的唯物論)に對抗できると考へられる。先生の用語でいへば「自然必然的」な考へ方(唯物論)、「精神必然的」な考へ方(汎神論)はいづれも非にして「目的觀批判的」な立場が正しいのである。

さて西南ドイツ學派の立場において朝永先生は、存在論・價値論について體系的思索を續けたリツカートの途に出

られず、哲學史家として、もつばらヴィンデルバントに傾倒された。晩年（昭和二十四年）諸家の執筆にかかる「哲學研究入門」（下村・淡野編）に「一般哲學史」なる短篇を寄せられ、哲學史の方法論・略史・文獻についてのべられたが、ここでもヴィンデルバントへの傾倒ははつきり現はれてゐる。いまそれによつて先生の哲學史研究の方法をうかがふと、第一、確實な事實の報道。第二、この事實の説明、第三、批判といふ三つの手続きのうち、第二の「説明」においては、過去の哲學の内容的論理的考察（事理的要因の考察）、一般文化史的考察（文化史といつても廣く政治史をもふくむ）、個性・心理的考察、の三つがふくまれてゐる。そして「説明」のこの三つの側面をめぐつて、哲學史の歴史を省みることが出来る。哲學史を學問として創めたヘーゲルはもつばら第一の事理的要因のみを考へて論理的構成に陥つたが、その後のドイツ哲學史家、エドゥアルト・エルトマン、ツェラー、クローノー・フィツィンジャー、最後にヴィンデルバントが、他の二つの要因をも顧慮して、哲學史の黄金時代を現出したのであつた。

しかしながら朝永先生御自身の問題として、上のドイツ哲學史家を追ふ歴史家となることについての反省には深いものがあつたことを注意せねばならない。先生のごとく一つの方向をしかとらへて離さぬことは、それだけの用意なくしてなし得ることではないのである。『人格の哲學と超人格の哲學』中の一篇、「哲學と時代」において、そのことはうかがへる。それは第一に近世哲學史を「時代」即ち上の第二の要因から説明する試みを示し、第二に哲學史家と體系家との關係に觸れてゐる。第一の點については、哲學が存在論であるとともに價值論であつて、思想家の情意的態度を表現する以上、哲學史は單に論理的發展とのみは見られず、「個性」と「時代」との表現でもある所以をのべて、民族の政治的狀勢（「時代」と、その時の哲學の型との間に、ある對應關係を認め得るといはれる。すなはち、(A)政治的統一の緊密なる場合には哲學は多く獨斷論的體系的であり、分裂の時代の哲學は多く懷疑論的である。(B)そして政治的統一の時代において、その統一が專制的である場合は、哲學は自由を否定した決定論的體系となり、個人の自由が容れられる場合（立憲君主政が念頭にある）には、哲學は獨斷論的であつても自由論的である。朝永先生はこの對

應關係をまづ大まかに十七・十八・十九世紀の哲學の區別（決定論的體系・懷疑論・自由論的體系）にあて、ついでそれぞれの世紀の内にも同じ差別が見出されると考へられた。就中ドイツ十九世紀哲學についてその事を考へ、自らの立脚地である批判主義をもその點から説明された。

* 解放戰爭時代のドイツの民族精神の統一に即してドイツ觀念論の獨斷論的體系、一八三〇年から六〇年にいたる分裂時代（プロシヤとオーストリアの對抗ならびに民主主義の運動）において懷疑論・唯物論があり、その後二十年間にはプロシヤによるドイツ統一の表現として新形而上學派（ロツツェ・フェヒネル）が現はれ、七〇年以後はドイツの政治と社會は新たな分裂をはらみこれに應じて批判主義の哲學が興つてゐる。

しかしながらこのやうに哲學が時代の性格をうつすとしても、もちろん全く受動的にはない。哲學が思想家の個性的な思惟によつて支へられ、且つ事理に従つて時流を批判するものであることは、哲學史の方法自體の認めるところである。ただし、哲學史家自身が歴史的に自己の見地を自覺するとき、或は逆に一定の哲學的立場を探りつつ歴史家であらうとすると、問題は、おしつめれば體系的思惟と歴史的考察との矛盾といふ形をとるであらう。いま歴史的考察を「時代」の見地で代表させるとして、その見地からの歴史的知見を、體系的思惟といかに結びつけるべきか。朝永先生は、「時代」の性格に意識的に體系的思惟をそはせること、即ち哲學の「時代」による規定そのものを哲學的思索の動機とすることは、却つて誤まりであると考へられた。最も悪しき場合にそれは阿世といふことになる。あたかも功利主義において一般の福祉といふ善の定義にかなふ行爲が、現實に功利を自指すことによつてよりはむしろ逆に功利をはなれた動機によつて實現される、といふパラドクスと同様な事態が、歴史的考察と體系的思惟との間に成り立つ。哲學の歴史家と體系家とは、このやうなパラドクシカルな意味で相互補足的關係に立つと考へられる。これはおそらく後年まで先生の持せられた見解であつたらうと推測されるのである。

二

さて上のやうな立場と方法論とをもとにしての朝永先生の哲學史研究の業績はいかなるものであつたか。特殊研究としては、大正十一年に『カントの平和論』、大正十四年には『デカルト』、さらに昭和十一年に『デカルト・省察錄』がある。なほ昭和二十三年には『哲學史的小品——ルソー・カント・ロツツェ』が出たが、これは舊稿を集められたものである。哲學史の一般的敘述としては『西洋哲學史概説（近世前期）』（昭和七・八年、岩波講座「哲學」）、最後に昭和二十四年に至つて『ルネサンス及び先カントの哲學』が「西洋近世哲學史第一冊」として公けにされた。第二冊以下は終に出されなかつた。

まづカント研究から見よう。朝永先生のカント解釋は概していへば新カント學派のそれに主として據つたものであつて、その特色は周知のやうに、第一批判における科學批判の方法を道徳や藝術の原理の批判にもおし及ぼすことであり、カント自身が特に道徳において形而上學再建の地盤を得たと考へたに對し、ここでもあくまで形而上學を排して、カント哲學を文化の哲學として解釋することである。『哲學史的小品』中の「カント哲學序説」は大體さういふ見地に立つてゐる。しかしカントが後續の形而上學者を導いたことはもちろん歴史の事實であるから、カント自身の形而上學的志向に顧慮は拂はれてをり（一〇八頁注）、殊に『近世に於ける我の自覺史』において、カントからフイヒテ以下の形而上學への移行の理由をカント自身の中に求めて、その『宗教論』における神祕主義につき、注目すべき解釋を朝永先生は與へられた（九六一—一〇〇頁）。

けれどもカントについての先生の最も特色ある研究は『カントの平和論』であらう。そこには政治や文化に對する批評家としての先生の見識がよく現はれてゐる。まづカントの道徳哲學から、戰爭が人格を單なる手段とするが故に惡であつて、平和が道徳の要求なることを導き、近世の平和論の前史をのべた後、カントの「永遠平和論」の各條項を檢討する。通讀して鮮かに心に残るのは次の二點である。第一、シュリヤサンピェールと異なるカントの獨創は、國

際的戦争防止のためには、國內政治が republikanisch であるべきであり、逆に専制が戦争の有力な原因である、と認めた點に存する。第二、戦争を根絶する現實的手段としては、「世界王國」(今のことはいへば帝國主義)との注あり)を壓制下の平和として斥けた後、カントは、「世界共和國」と「國際聯合」とのいづれをとるかといふ問題に面して、結局後者を選んだが、その選擇の理由を朝永先生は不徹底とせられ、カントの立場からはむしろ世界共和國をこそとるべきであつて、諸國家の主權を認めた上での國際聯合をよしとするには、單に現實への讓歩といふだけでなくて、多くの國家の存在を權利づける價值的理由が示さるべきだ、と考へられた(六五頁以下)。世界政府でなくて多數主權國家の存立せねばならぬ理由を *quid juris* として問はれたのである。

次に先生のデカルト研究を見よう。ここでは哲學史研究における先生の見解の推移をいくらか立ち入つてうかがふことができる。まづ大正十四年の『デカート』(後『デカルト』と改む)では、傳記の部分においてデカルトのオランダ轉住後『方法敍説』出版に至るまでの事情の考證と、學說の部分においてデカルトの道徳論の吟味とは、先生の苦心に成るものであつて極めて生彩に富んでゐる。しかし全體としての解釋においてはナートルプの影響が目立つ。すなはちデカルト前期の方法的反省において *Trigebiet* への志向をみとめ、そこにカントの認識論の萌芽が念入りに採ねられる。しかし後期のデカルトは *Transienz* を形而上學的に求めることになつた故に、カントの意味での批判的見地を逸脱して獨斷的形而上學に至つたものと判定される。そして朝永先生は、デカルトにおける勝義の *Transienz* としての神を、眞理のイデーそのものと解釋して、デカルトの獨斷論を和げようと努力された(三九七頁以下)。

しかるに昭和十一年の『デカルト省察録』では、デカルトにおける自然學の基礎づけが、形而上學における懷疑のすすみに即して反省され、精神を身體から引きはなす懷疑の途こそ、中世並びにルネサンス期の感覺的擬人論的な自然觀を脱却して悟性的思惟による數學的自然學を確立する途であつた、といふ點が注目される(二三—三四頁)。すな

はちデカルトにおいてはカントの批判的觀念論とは異なる實在論的見地から自然學の客觀性の基礎づけが行はれてゐることをはつきり認められ、かくてデカルトの形而上學の意義は前者におけるよりもはるかに重いものとなつてゐるのである。けれどもデカルトの神は、やはり認識の保證のために理論的に立てられたイデーにすぎぬと考へられ、もし物質の概念が神の概念同様の役目を果たすことが出来たならば彼れは之をば神の概念と同様に取扱つたであらうといふヴィンデルバントの言葉に同意されてゐる(三三頁)。

しかしながら朝永先生のデカルト解釋はその最後の形においては(『ルネサンス及び先カントの哲學』一六一頁)、さらに進んでデカルトの神がやはりキリスト教の意志的な神であることに注目するに至る。しかもデカルトの神は永遠眞理さへもの創造者であつて、先生の語を用ゐればトミストの主知的に考へられた神ではなくて、スコテイストの主意的見地から見られた神なのである。神はイデーでなくてイデーの創造者である。——ここにおいて、デカルトの形而上學を十七世紀の思想的狀況の中に置いて、その獨自性を全面的にみとめることになつた、といふことができる。そしてそのことは他の十七世紀哲學の解釋に對しても大きな影響をもつであらう。しかも事柄自身の歸結はカント的二元論を宗教的次元にまで深めるに至る筈のものである。

さて上のやうな朝永先生のデカルト解釋の最も熟した立場を容れた『ルネサンス及び先カントの哲學』(昭和二十四年)こそ、先生の哲學史の一般的敘述の完成した姿を示すものである。(これに先立つ「哲學」講座中の簡潔な敘述との比較に、もはや立ち入る必要はあるまい。これこそ先生の事實上の *life-work* であり、大正五年の『近世における我的自覺史』に應ずる力作である。例によつて明晰且つ精細、邦語による近世前期の哲學史にしてこれほど立派なものほかにない。「先カントの哲學」といふ題名は依然としてカント主義者の命名であるが、上にデカルトについて見たやうに、解釋はヴィンデルバントを超えて深められてゐるのである。それを十七世紀の哲學の取扱ひについ

て少しく調べて見よう。

マルブランシの哲學の吟味において、メランがマルブランシを汎神論と難じた點を朝永先生は特にとりあげられ、汎神論に對するヤリスト教の反撥に注目されてゐる。——最もきつぱりした汎神論者スピノザの解釋においても體系の分析と批判において、先生の以前の諸著に見られるとは、ちがつた鋭さが示されてゐるやうに思はれる。(以前にはデカルトの形而上學が極く自然にスピノザのそれに移行すべきものといふ風に說かれる場合が多かつた)。——ライブニッツについても、その前期の理性論的形而上學は、彼が後期の『神義論』においてトミストの明知主義とスコテイストの主意主義との調停を意識的に企てるに至つたときに、少なからず動かされたと認められる。例へば前期において充足理由律は、いはゆる因果律に近いものであるが、後期において神の意志にもとづく最善の法則といふ意義をより多くもつにいたつたと考へられてゐる。——さきにデカルト解釋について見られた事態が、十七世紀哲學の全體に擴充されてゐることを、明かに認め得るであらう。簡潔な敘述の中に、一々の思想家に對する長い間の親炙と對決との結果が込められてゐるのである。

以上主として十七世紀哲學について先生の深い用意の一端を挙げたにすぎないが、ルネサンス期並びに十八世紀に ついても、同様な洞察が多く含まれてゐることはいふまでもない。さうして、このやうな、哲學の內的論理的吟味とともに、哲學史に對して要求される他の二つの要因の考慮も極めて適切に行はれてゐる。文化史的要因の考慮といふ點では、ルネサンス哲學の見事な敘述を挙げねばならないであらう。また哲學者の個性を刻み出す點でも、深く教へられるところが多い。特にロックの章がその好例ではないかと思はれる。私の主觀的印象によるところもあらうが、朝永先生はカント以前の哲學者のうち、人間としてはロックに最も親しい感じをいだかれてゐたのではないかと思はれる。清廉淡泊にしてしかも「氣魄ある志士」、穩健ながら譲るところなき自由主義者としてのロックを、先生が舉げられた箇所は他にも多くあるのである(例へば『デカルト』六頁)。

最後に、朝永先生の辿られた途を全體として回顧するに、先生は御自身の哲學の立場を、主としてカント以後十九世紀の汎神論と自然主義とに對する批判を通じて、固められたのであつたが、その後は主としてカント以前の近世哲學の史的研究に向はれた。さうしてすでに見たやうに、深い用意をもつて歴史の知慧を學びとられたのであつた。いまこの近世前期哲學への傾倒の結果をもつて、ふたたびカント以後の哲學の吟味に臨まれたらばどうであつたらうか。十九世紀ならびに二十世紀の哲學に對して新たな鋭い對決を示されたことであらう。哲學史家と體系家とが逆說的に相補ふ所以をさらに鮮かに示されたことであらう。——先生の近世哲學史の第二冊以下が與へられずに終つたことはまことに残念といふほかはないのである。

(筆者 京都大學文學部「西洋哲學史」助教授)

(了)

前 號 目 次

フランツ・ポアズ(愛前)……………堀 喜 望

—その歴史の概念について—

超越論的演繹の生成……………森口 美都男

—一七七〇年代のカント—

書評 ルカツチ「若いヘーゲル」(橋本益雄)

書報 昭和廿七年度京大文部部哲學科講義題目

關西哲學會廿七年度春期學術大會報告要旨

「哲學研究」第三十五卷目次

次 號 瞭 告

力と生命……………澤 瀧 久 敬

フランツ・ポアズ(愛)……………堀 喜 望

—その歴史の概念について—

書報 アメリカ研究京都セミナー記事

哲學・印度哲學部臨時報告目録

Field and Matter

By Sin-itiirô Tomonaga

This article describes the historical development of the modern concepts of field and matter from the older idea of ether. It is outlined how the ether hypothesis had to be abandoned and how the field concept was introduced in its place. Here the discovery of the relativity theory played an important rôle, clarifying the essential difference between the field and ether concepts: the impossibility of determining the motion of a body relative to the field. The second important discovery was that of the quantum theory, which has made possible not only the unification of the wave and corpuscular theories of light, but also the establishment of wave theory of any kind of material particles. As a result of this discovery there can no longer be any distinction between light and material particles in that both are waves in the corresponding fields; the fields only are the ultimate objects of physics, matter being the excitation of waves in the field.

Professor Tomonaga as a Historian of Philosophy

By Matao Noda

As to the general philosophical standpoint of the late Prof. Tomonaga, we can roughly characterize it as that of Neo-Kantianism. In his early work "*Absolutism and Personalism*" (1939) he shows himself to be sympathetic for the 'personal idealism' of British and American philosophers. But his scope then not being restricted to philosophy in the proper sense of the word, he gives us many valuable suggestions in the comparative study of cultures. For instance, the rôle which we Japanese are to play in the field of ideas is predicted to be not that of a creative worker, but that of a fair critic.

It was in his second work "*The Development of the Ego Conception in*

Modern Philosophy” (1916) that we find him definitely attached to Neo-Kantianism in Germany. He had in the meantime personally attended the lectures of W. Windelband (1910-12). Neo-Kantianism, as is well-known, represents a liberal, personalistic standpoint as against two other fronts—the Hegelian absolutism and the various forms of naturalism, Marxism included. And the school was so congenial to Prof. Tomonaga that he remained quite long in it, which was rather a rare case with his generation.

Starting from this view-point, he as a historian of ideas came to be chiefly interested in the pre-Kantian philosophers, Descartes in particular. Let us follow his works in the order of time. In 1922 he published “*Kant's Theory of Peace*” which may be regarded as a masterpiece among many other contemporaneous studies on the moral and political philosophy of Kant. But in the following years Descartes was his chief occupation, and in this we can trace the gradual shifting of his view. In “*Descartes*” (1925) his appreciation of Cartesianism was distinctly that of a Kantian, Descartes in his methodology was regarded as a forerunner of Kant, but Descartes in his metaphysics was judged as dogmatic. But “*The Meditations of Descartes*” (1936) finds in the Cartesian distinction of mind and body an effort to establish the objectivity of new mathematical physics, in contradistinction to the idealistic solution of Kant.

In his last and largest work “*History of Modern Philosophy in Pre-Kantian Period*” (1949) more concern is shown to the voluntarism in Cartesian metaphysics. Descartes' idea of God was that of a Scotist as against that of a Thomist, Tomonaga says. Though his heart was still tenderly attached to his old teacher Windelband, in this magnum opus he actually goes beyond the Neo-Kantian view of history. The above motif in his interpretation of Descartes is finely and thoroughly extended to other 17th century thinkers such as Malebranche, Spinoza, Leibniz, giving us many fresh perspectives. Mention should also be made of the fascinating chapters on the philosophers of the Renaissance, and of the

penetrating analysis of the philosophy of Locke.

Starting as a Kantian, Prof. Tomonaga was thus led by his historical studies back to the pre-Kantian thinkers. What he has actually accomplished in those studies makes us miss all the more what he could have accomplished but for his age, namely, a renewed examination of the post-Kantian period.